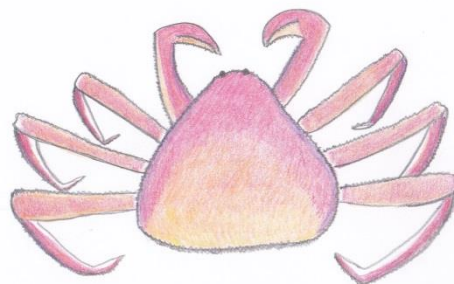


ツガニ ～酒井明 説話集33※～

秋も深まってイタンボの白い花が咲く。

モクズガニ、この付近ではツガニで通っている。はさみ爪に毛のついたカニが川下りをする時期である。脂がのって一番味のよい頃だと、昔からヤナやカニカゴで捕られてきたが、近頃は商売用に年中捕られているという。どこもそうらしいが、松田川のツガニ漁もめっきり捕れなくなったという。



川下りをするのは産卵のためで、このカニも潮水でないと卵を孵すことができない。一島付近では、冬場このカニがたくさん見られる。こちら辺で子ガニになったものは段々と松田川、篠川をのぼっていく。

いろいろな魚、うなぎなんかに食われるものも沢山あるが、一匹の親が30万、50万という卵を産むというから、昔と比べてそれ程減ることもなさそうだが、川という彼等が暮し育つ場所が違って来たということと、人間が獲りすぎるということが主な原因ではなかろうか。

川をのぼったツガニの子は、こんな所と思う様な山合いの小さな谷川までのぼっていく。一人前になるまでに2年3年かかるようだが、その辺まだ確かなことは分からない。

そのうちはっきりするだろうが、何かと人間知ったような顔をしているが分からんことがいっぱいである。

ずい分大きなものでも、山の奥で冬を越すものがある。全部が全部下るとは限らない。なぜ残るのだろう、いろいろ考えられるが確かなことはこれもまだいえない。

イノコ草の穂につられて、穴から出てくる子ガニ。これも大切な自然だが、こんなものまで少なくなってきた。

子どもたちがはしゃぎながら遊びまわる松田川に戻す手立てはないのだろうか。ツガニの子どもの生まれる季節、そんなことも考えてみる。

※) 平成26年3月に逝去された宿毛市出身の酒井明さんは、長年教鞭をとる中で地域伝承や動植物の生態のフィールドワークを重ね、退職後も宿毛市文化財保護審議会(当時)長などを歴任、益々研究を深めながら観察日誌や説話、伝承技術などを膨大な手書き原稿にまとめられました。

ご遺族より宿毛歴史館に寄贈された原稿から、順次「酒井明説話集」として公開してまいります。